在宅介護と地域支援の視点からみた高齢者住宅の住まい方と平面評価

ON PLANNING AND EVALUATION OF HOUSE FOR THE AGED FROM THE VIEWPOINT OF COMMUNITY AND NURSING AT HOME

常広陽子 — *1

野口孝博 — *2

Yoko TSUNEHIRO — *1

Takahiro NOGUCHI — *2

キーワード:

高齢者, 居場所, 在宅介護, 地域支援, 戸建住宅, 街路側居室

Keywords:

The aged, The living place, Nursing at home, Community, Detached houses, Living space on street

This paper aims at studying the state of a future dwelling which considered nursing at home and community. It made clear the aged's consciousness and evaluation to the side of the street in houses. As a result of evaluating the present house plan based on conditions required for people, it turned out to be good for the aged that there is the living place by the side of a street in houses, in community and nursing at home.

1. はじめに—意義・目的

高齢社会の到来に伴い、高齢になっても住み慣れた住宅に住み続けられるよう、在宅福祉や地域福祉の充実が求められている。一方で、現在の住宅計画では、住宅内の居住環境の充実を重視し、福祉サービスの享受しやすさ（特に住宅と外部との関係）は必ずしも十分に考慮されていない。プライバシーや騒音の問題などから、街路側にある居室のイメージは一般的によくはないが、これからの高齢社会に対応しよう、社会との接点である住宅の街路側のあり方を見直す必要がある。将来的に、福祉サービスを受けやすく、家族の介護負担を軽減させる住宅をつくるのが高齢社会の住宅計画に必要な条件の一つと考えられる。

本研究は、戸建住宅に居住する高齢者の居場所（1日の内で最も長く[就寝時間を除く]過ごす居室）¹⁾と住宅の街路側のあり方に主眼をおき、①高齢者住宅（高齢者の居住する住宅）の居住実態と②在宅高齢者の住宅の街路側のあり方に対する意識を把握する。③在宅介護と地域支援（地域住民によるサポート）に必要な高齢者住宅の条件を検討し、④その条件を考慮した評価項目を用いて高齢者住宅の現状評価を試みる。これらを通じて、これからの住宅のあり方を検討するための新しい計画的視点を提供することを目的とする。

既往研究に、在宅介護及び地域支援のしやすさの観点から住宅の街路側居室のあり方を取り上げたものはほとんど見られない。関連する既往の研究としては、高齢者の住生活を明らかにするため住宅内での拠点性に注目した研究^{2) 3) 4)}や方位観からみた住宅プランに関する研究⁵⁾、開口部形状に注目した町並みに関する研究⁶⁾などがある。また、最近のバリアフリー住宅の傾向に、段差解消などの物理的バ

リアの除去に留まらず、外とのつながりを重視する傾向が見られ始めている⁷⁾。平成12年の介護保険制度開始に伴い、介護のしやすさやプライバシー問題など心のバリアの除去も考慮され始めているが、それに対する有効な解決手段はまだ提案されていない状況である⁸⁾。

本研究は、地域のコミュニティ形成や在宅介護の負担軽減など具体的な利点に着目し住宅の街路側のあり方を見直す点で、これからの住宅計画に対して意義のある研究である。

2. 調査方法と回答者属性

築25年を経過し、高齢化の進んだ札幌市「もみじ台団地」の戸建住宅に居住する60歳以上の高齢者を対象に、アンケート調査を行った（01年9月）。アンケート配布数は262部で回収数は232部（回収率88.5%）だった。さらに、要介護認定者（3軒）を含む9軒に対し、ヒアリング・住まい方調査を行った（01年10月）。また、住民参加型の地域福祉の実態について、地域福祉従事者にヒアリングを行った（02年1月）。回答者の属性は表1のとおりである。また、年齢や身体状況はふだんの過ごし方に違いを生み、それによって介護・支援問題に対する意識が異なると考え、要介護認定の有無と「夏のふだんの過ごし方」^{注1)}を基に回答者のタイプ分けを行った。要介護認定を受けている回答者を「要介護認定者」、その他を「外出タイプ」、「家の周囲タイプ」、「家の中タイプ」の3つに分け、計4タイプに分類した。

表1. 回答者の属性と健康状態

年齢		健康状態(家の中を歩く時)		家族形態	
60～64歳	57人(24.6%)	不自由なく歩く	202人(90.2%)	単独世帯	17人(7.6%)
前期高齢者	116人(50.0%)	ゆっくりと歩く	17人(7.6%)	夫婦のみ	133人(59.1%)
後期高齢者	59人(25.4%)	補助器具使用	3人(1.3%)	同居世帯	27人(12.0%)
計	232人(100.0%)	介助必要	1人(0.4%)	親と子	43人(19.1)
平均年齢	69.5歳	その他	1人(0.4%)	その他	5人(2.2%)
		計	224人(100.0%)	計	225人(100.0%)

*1 札幌市役所 工修
(〒006-0012 札幌市手稲区富丘2-7-4-43)

*2 北海道大学大学院工学研究科 助教授・工博

*1 Sapporo City Office, M. Eng.

*2 Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido University, Dr. Eng.

3. 「居場所」の居住実態

在宅高齢者は住宅の中で一定の居場所をもち、一日の大半を過ごしている。回答者の8割が「居間」を居場所とし、その滞在平均時間は夏が8.4時間、冬は9.4時間と非常に長い。また、居場所と外との視覚的・空間的なつながりを望んでいる高齢者が大半であることがわかった。回答者の8割が居場所から外の景色を「よく眺めてい」て、回答者の7割が居場所から直接外と出入りできることについて「便利だからよい」と回答している。居場所からの眺めとしては「庭の草木や花(94%)」や「野鳥(55%)」など庭の要素が多いが、「街路を歩く人(33%)」や「街路樹(14%)」など街路の要素を眺めている高齢者もいる。ヒアリング調査では、自力で外出不可能な高齢者には、特に訪問客や街路を歩く人の様子を眺めるのを楽しみとする傾向がみられた。

居場所は南向きの部屋に設けられていることが多く、街路との関係を意識している高齢者は少ない(表2)。住まい方調査より、方位よりも在宅介護のしやすさを重視して、北側に街路があるにも関わらず、街路側に高齢者の居場所を設けている事例がみられた(1軒)。また、寝室との関係では、「家の中タイプ」や「要介護認定者」のように身体が不自由になるほど、居場所と寝る場所が同じ部屋になる傾向がみられる(図1)。住まい方調査事例では、「一体的に使う」が1/9軒、「同じ部屋」が2/9軒あった。

4. 住宅の街路側のあり方に対する意識

居場所を街路側に設けることについて、全体の12%が「安心感」^{注2}の面で、24%が「楽しさ」^{注3}の面でよいと感じていることがわかった(図2)。特に、自力で外出不可能な「要介護認定者」は、「楽しさ」の面を約4割が評価している。また、街路から高齢者の様子を眺める住宅は、地域住民による高齢者の気軽な安否確認を可能にする点で、地域支援のしやすさに非常に有効である(地域福祉従事者ヒアリングより)。

寝室は最もプライベートな居室だと考えられてきたが、介護保険導入

表2. 「居場所」と街路の関係

	街路に対する、住宅内での居場所の位置				総数
	街路側	街路と反対側	横側	その他	
住宅からみた街路のある方角					
南側	68.1%	9.7%	13.9%	8.3%	72人
北側	5.9%	66.7%	17.6%	9.8%	51人
東・西側	8.8%	11.8%	64.7%	14.7%	34人

図1. 「居場所」と寝室の関係

図2. 「居場所」を街路側に設けることについての意識

以来、要介護の高齢者の寝室にはヘルパーなどが入ってくるため、第三者との関係という新たな問題に対処しなければならなくなった。身体が不自由になった時を想定した場合に、寝室を街路側に設けることについて回答してもらった結果、「家の中タイプ」や「要介護認定者」の場合は「プライベートを考えると難しい」が皆無で、「外出しやすさ」の面で4割がよいと回答した(図3)。プライベート問題よりも、街路側に寝室(兼居場所)があることにメリットを感じていることがわかる。また、全体の1割程度が「家族のプライベートが守られ、ヘルパーの仕事がしやすい」点を評価していることもわかった。現状で介護問題に直面していない高齢者でも、それに対する事前の対処法として街路側居室に理解を示すことがわかった。

5. 要介護者のいる住宅にみられる特徴

「要介護認定者」のいる住宅の3軒中2軒では、ヘルパーが入ることのできる領域(以下、ヘルパー領域)がその他の家族の生活領域と分離できる工夫がなされていることがわかった(図4)。図4は、要介護者の居場所(兼寝室)が街路側にあり、玄関に近接しているため、ヘルパー領域が22㎡(20%/1階)と少ない。また、ヘルパー領域が40㎡(38%/1階)と比較的多くなるが、廊下を利用して領域分離を行っている住宅もあった(1軒)。ヘルパーによる介護中でも、その他の家族の生活は守られるので心理的負担の軽減に繋がっている。また、寝室と設備の近接傾向がみられた。生理的欲求を満たす他、在宅介護の負担軽減や介助時にヘルパーと他の家族との動線が交わることを防いでいる。設備を高齢者専用を設置する場合は、最小面積で高齢者の寝室に配置している。また、共用の場合は面積を十分広くとり、高齢者寝室に近接しながらも他の家族が使用しやすいような動線の工夫がみられた。その他、庭や街路の様子をよく眺められるようベッドやイスを配置したり、街路の様子を見やすくするために常にかーテンを開け放している住宅のように、居場所からの眺めに配慮していることがわかった。

図3. 身体が不自由にな時を想定して、寝室を街路側に設けることについての意識

図4. 要介護認定者の居場所が街路側にあり、ヘルパー領域の分離が行われている事例

6. 在宅介護・地域支援のしやすさに関する住宅平面評価

6-1. 評価方法

在宅介護と地域支援の視点から、住宅に改めて必要となる計画条件を検討した。計11個の項目を抽出し(図5)、この評価項目を用いて事例評価を行った。対象事例は住まい方調査を行った9軒とし、介護を中心に考えて増改築した3軒を「要介護者のために配慮して増改築された住宅」(以下、Aタイプ)とした(表3)。その他を「街路が住宅の南側にある住宅」(以下、Bタイプ)と「街路が住宅の南以外の方角にある住宅」(以下、Cタイプ)に分類し整理した。高齢者の居場所が街路との関係に対処しやすいものとして、街路が南側にある住宅を特に取り上げて分類した。評価項目は、**居場所要素**(居場所に必要なと考えられる要素)、**寝室要素**(身体が不自由になった時、居場所が寝室と同化することを考慮した要素)、**設備要素**(設備との関係で必要な要素)の3つの主な構成要素から成る。具体的には、①～③が地域支援のしやすさ、⑥～⑪が在宅介護のしやすさに関わり、特に⑥⑦⑧⑩⑪は在宅介護でのヘルパーと家族の動線分離と家族の生活領域の確保に関わる項目である。第三者との関わりをもつ①～③、⑥～⑧、⑩⑪項目について、地域支援や在宅介護の面で非常に有効である場合を◎、第三者との関わりのない④⑤⑨項目について有効である場合を○と評価する。②のように遮蔽物を避ければ外部とのつながりを持つことができるなど多少の改善をすればよい場合や⑥のように「どちらともいえない」場合を△、③のように現状でもある程度の様子を感じることができる有効な状態を○とした。

評価方法は、調査者がこの評価項目を用いて、住宅平面図(1階)と調査から得た情報を基に、各住宅について介護や支援のしやすさに関する「現状評価」と「可能性評価」を行うものである。「現状評

表3. 評価対象事例について

住宅	建築年 (年)	増改築年 (年)	家族構成	身体状況(介護認定の有無)	サービス内容	1階面積 (㎡)	敷地面積 (㎡)	街路の ある方角
A1	1974	1999	母80代+夫婦+子1	母:介護4/巡・ヘル・デ・看		111	222	角地(北/東)
A2	1976	1993	夫婦70代	妻:介護4/デ・看・入		104	273	角地(北/西)
A3	1972	2000	高齢夫婦70代+夫婦+子2	妻:車椅子生活・要介護		85	258	南
B1	1975	-	夫婦70代	健康		73	219	南
C1	1975	-	夫婦60代	健康		84	275	角地(北/東)
C2	1973	-	夫婦80代	夫:介護2/デ		77	280	東
C3	1973	-	夫婦(70代+60代)	夫:足をひきずる/妻:喘息		87	308	角地(北/西)
C4	1998	-	高齢夫婦60代+夫婦+子3	夫:持病のため外出困難		98	280	西
C5	1991	-	夫婦70代	健康		98	272	西

価」は現在の居場所、「可能性評価」は介護や支援の視点からみて望ましいと考えて想定した居場所、について各項目の評価を行った。◎が多いほど、介護・支援をする側、される側の両者にとって負担の軽い住宅として高く評価される。

6-2. 評価の結果

各住宅における「現状評価」と「可能性評価」について図6に示す。特徴的なものを取り上げると、A1は北側街路にも関わらず、在宅介護のしやすさを考慮して街路側に高齢者の居場所を設けている(図4)。居室の街路側と南側の2面に窓を設えることで、街路の様子と庭の眺めの両方を選択して楽しむことができる。また、外から中の様子が感じられる点で、地域支援の面でも高く評価される。A1と

図5. 在宅介護と地域支援の視点からみた住宅評価項目 (◎非常に有効、○有効、△改善が必要(①②)・どちらともいえない(⑤⑩)、×非有効)

図6. 在宅介護と地域支援の視点からみた各住宅平面の「現状評価」と「可能性評価」(①～⑪の評価項目は図5を参照のこと)

A2は、ヘルパーが、玄関ホールや廊下から直接高齢者の居場所に行くことができ、家族の生活領域に立ち入ることがない点で高く評価される。

南入り住宅(A3・B1)は、「現状評価」、「可能性評価」ともに、外部との関係を持ちやすく地域支援の受けやすさの点で評価されるが、在宅介護ではヘルパーが居間などの家族団楽の場を行き来するので、ヘルパーの動線を家族の生活領域と分離する工夫が必要である。

・Cタイプ全ての全てが街路側に居場所を設けていないため「現状評価」は低い。特にC5は、地域との関係を意識していないため、街路側に居室は無く、街路から住宅内の様子はわからない。在宅介護をしやすい点では評価できるが、地域支援を受けづらい点で評価は低い(図7)。一方、C1は「可能性評価」でAタイプと同程度評価でき、将来的に介護や支援に対応しうる住宅であることがわかった(図8)。街路に面した窓のある居室(現在客間)を要介護時に居場所に転用できるように、住まい方に合わせた使い方のできる点を高く評価できる。また、両住宅ともに、続き間があるため視認性と領域分離を自由に行うことができるのも特徴として挙げられる。従来こうした続き間は住戸計画の上であまり評価されていなかった部分であるが、特にC1のように街路側居室と居間が続き間のような場合、本研究の視点から庭側と街路側の両方が見通せる点で改めて評価できる。

7. まとめ

本研究では、地域全体で高齢化の進む住宅地の高齢者を対象に調査を行い、これからの住宅のあり方を検討するための新しい計画的視点の提案について考察した。以下にその内容を要約する。

建設年：1991年

家族形態：夫婦のみ(夫76歳・妻74歳)身体状況：ともに健康

図7. 在宅介護や地域支援の視点からみて評価の低い住宅事例(C5)

建設年：1975年

家族形態：夫婦のみ(夫68歳・妻64歳)身体状況：ともに健康

図8. 在宅介護や地域支援の視点からみて評価の高い住宅事例(C1)

まず、居住実態の面からは、①現状では街路との関係を意識して居場所を設える高齢者はほとんどいないが、そのことについて許容する高齢者は1~2割程度いる。特に、自力で外出困難な高齢者は、「街路を歩く人を眺める楽しさ」や「外出のしやすさ」の点で高く評価していることがわかった。②身体が不自由になると、居場所と寝室を一体化する傾向がみられた。居場所となる居室と寝室を将来的には一体的に利用することが可能な計画が必要である。

また、要介護者の居る住宅改造の事例からは、①住宅の街路側に高齢者の居場所を設ける、②ヘルパーと家族の領域分離、③寝室・設備の近接配置など、多くの工夫とともに本研究の視点である街路側対応の計画がすでに実施されていることが明らかになった。

在宅介護や地域支援の視点からみた高齢者住宅の平面評価からは、①「現状評価」では、南側に街路がある住宅の場合は外部との関係を持ちやすく、南以外の方角に街路がある住宅の場合は、外部との関係を持ちにくい傾向がある。②「可能性評価」では、南入り住宅はヘルパーの動線を家族の生活領域と分離する工夫を行うとよいこと、③街路側に窓のある居室があり、広めの玄関ホールや廊下などでヘルパーとの領域分離をしやすい住宅プランの評価が高いこと、④続き間空間の有効性、などが明らかになった。

総じて、住宅の街路側に高齢者の居場所があることは、在宅介護の面では、要介護者の生活意欲促進と介護する家族の心理的負担の軽減につながり、地域支援の面では、住民による日常的なサポートを可能にすることが明らかになった。本研究において、在宅介護や地域支援の面で、街路側居室の重要性が示唆された。また、事前に街路側のあり方の重要性を知ることができれば、健康な高齢者も街路側居室を許容する可能性があることがわかった。平面評価では、街路側に窓があって玄関から直接行き来できる居室があり、ヘルパーと家族との領域分離をしやすい住宅プランが高く評価される。また、続き間の活用による新しい居場所対応型住宅平面の開発可能性も高い。このように、街路側を意識した居場所設営、外出・訪問の容易さ、第三者動線の入り込みなどに対応した新しい概念による高齢者向け住宅計画理論の確立が重要である。

本研究を遂行するにあたり北海道大学眞嶋教授に指導を得た。記して謝意を表します。

参考文献

- 矢野めぐみ、野口孝博：戸建住宅における在宅高齢者の日常の居場所を中心とする生活行動様式、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.325-326、1999.9
- 片岡正章、鈴木義弘、中武啓至：住生活拠点の存在確認と拠点のとりわけ方、日本建築学会計画系論文集、第460号、pp.71-80、1994.6
- 古賀紀江、高橋鷹志：一人暮らしの高齢者の常座をめぐっての考察、日本建築学会計画系論文集、第494号、pp.97-104、1997.4
- 橋弘志、高橋鷹志：一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する考察、日本建築学会計画系論文集、第515号、pp.113-119、1999.1
- 植松徹治、野口孝博：戸建住宅における居住者の日照・方位観と平面構成、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.241-242、2001.9
- 耶雲恵、野口孝博：街路等の外部領域を意識した戸建住宅の開閉部形状と配置形式、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.1-2、2001.9
- 馬場昌子+福祉医療建築の連携による住居改善研究会、高齢者・障害者のための住居改善、株式会社学芸出版社、2001
- (株)U-E.P.、バリアフリーの家 新築&改築実例集、永岡書店、2001

注

- 注1) アンケートにて、『夏冬のふだんの過ごし方について』というアンケート項目に対する回答を基にしたものである。冬は雪の問題で外出を控える高齢者が多いことから、本来の生活スタイルをあらわすのは夏と考え、「夏のふだんの過ごし方」を取り上げた。
- 注2) 「安心感」は、「居場所を街路側に設けることについて」というアンケート項目に対する回答で、「声かけのきっかけが増えたり、見守られているような安心感がある」とのこと。
- 注3) 「楽しさ」は、「居場所を街路側に設けることについて」というアンケート項目に対する回答で、「街路を歩く人を見るのが楽しい」とのこと。

[2002年4月18日原稿受理 2002年7月23日採用決定]